

JAPANESE FOR FOREIGNERS

外国人
のための
日本語
例文・問題
シリーズ

14

擬音語・擬態語

ONOMATOPOEIA

*Innovative
Workbooks
In Japanese*

ぎおんご・ぎたいご

■日向茂男 ■日比谷潤子 著

監修 名柄 迪

荒竹出版

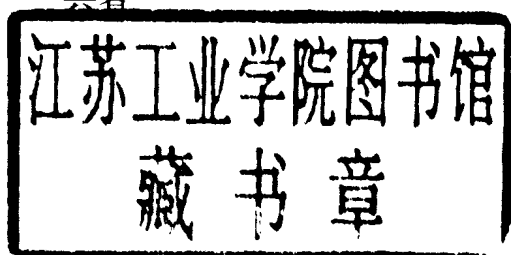
外国人のための日本語 例文・問題シリーズ14

擬音語・擬態語

日向茂男

日比谷潤子

共著



荒竹出版

著者紹介

日向茂男（ひなた・しげお）

1967年東京都立大学国語国文学科卒業。73年オーストラリア・ヴィクトリア州立モナッシュ大学大学院修了（M. A.）、ブラジル・サンパウロ州立大学客員教授、国立国語研究所日本語教育センター室長を経て、現在、東京学芸大学助教授。論文に「発表の工夫」、「日本語教育映画におけるテキストと文法の問題」、「マンガの擬音語・擬態語1～6」、「日本語における重なり語形の記述のために」他。教養書として「発表する技術」（ごま書房）、日本語教育のための参考書として「談話の構造」（共著、荒竹出版）がある。

日比谷潤子（ひびや・じゅんこ）

1980年上智大学外国語学部フランス語学科卒業。82年同大学院外国語学研究科言語学専攻博士前期課程修了、文学修士。88年ペンシルベニア大学言語学博士。現在、慶応義塾大学専任講師。著書に「談話の構造」（共著、荒竹出版）、「A Statistical Analysis of (g) in Tokyo Japanese' (*Proceedings of the N-WAVE XIII Conference*)」、「The Discourse Function of Clause-Chaining' (共著 *Clause Combining in Grammar and Discourse*, John Benjamins)、「社会言語学」（共著、『海外言語学情報』3、大修館書店）他がある。

外国人のための日本語例文・問題シリーズ14

擬音語・擬態語

平成元年七月二十日 印刷
平成六年九月二十日 三版

著者 日向茂男
日比谷潤子

発行者 荒竹勉

印刷／製本 中央精版印刷

発行所 荒竹出版株式会社

東京都千代田区神田神保町二一三四

郵便番号一〇一

電話 〇三—三二六二—〇二〇二

振替 〇一—〇一六—一六七—一八七

（乱丁・落丁本はお取替えいたします）

ISBN4-87043-214-5 C3081

監修者の言葉

このシリーズは、日本国内はもとより、欧米、アジア、オーストラリアなどで、長年、日本語教育にたずさわってきた教師三十七名が、言語理論をどのようにに教育の現場に活かすかという観点から、アイデアを持ち寄ってできたものです。私達は、日本語を教えている現職の先生方に使っていただくだけでなく、同時に、中・上級レベルの学生の復習用にも使えるものを作るように努力しました。

このシリーズの主な目的は、「例文・問題シリーズ」という副題からも明らかのように、学生には、今まで習得した日本語の総復習と自己診断のためのお手本を、教師の方々には、教室で即戦力となる例文と問題を提供することにあります。既存の言語理論および日本語文法に関する諸学者の識見を無視せず、むしろ、それを現場へ応用するという姿勢を忘れなかったという点で、ある意味で、これは教則本の実用文法シリーズと言えるかと思います。

従来、文部省で認められてきた十品詞論は、古典文法論ではともかく、現代日本語の分析には不十分であることは、日本語教師なら、だれでも知っています。そこで、このシリーズでは、品詞を、自立語では、動詞、イ形容詞、ナ形容詞、名詞、副詞、接続詞、数詞、間投詞、コ・ソ・ア・ド指示詞の九品詞、付属語では、接頭辞、接尾辞、(ダ・デス、マス指示詞を含む)助動詞、形式名詞、助詞、助数詞の六品詞の、全部で十五に分類しました。さらに細かい各品詞の意味論的・統語論的な分類については、各巻の執筆者の判断にまかせました。

また、活用の形についても、未然・連用・終止・連体・仮定・命令の六形でなく、動詞、形容詞ともに、十一形の体系を採用しました。そのため、動詞は活用形によって、u動詞、ru動詞、行く動詞、来る動詞、する動詞、の五種類に分けられることになります。活用形への考慮が必要な巻では、巻頭に活用の形式を詳述してあります。

シリーズ全体にわたって、例文に使う漢字は常用漢字の範囲内にとどめるよう努めました。項目によつては、適宜、外国語で説明を加えた場合もありますが、説明はできるだけ日本語でするように心がけました。

教室で使っていたく際の便宜を考えて、解答は別冊にしました。また、この種の文法シリーズでは、各巻とも内容に重複は避けれられない問題ですから、読者の便宜を考慮し、別巻として総索引を加えました。

私達の職歴は、青山学院、獨協、学習院、恵泉女学園、上智、慶應、ICU、東京学芸、名古屋、南山、早稲田、国立国語研究所、国際学友会日本語学校、日米会話学院、アイオワ大、朝日カルチャースセンター、アリゾナ大、イリノイ大、マサチューセッツ大、メリーランド大、ミシガン大、ミシガン州立大、ミドルベリー大、ペンシルベニア大、スタンフォード大、ワシントン大、ウィスコンシン大、アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター、オーストラリア国立大、と多様ですが、日本語教師としての連帯感と、日本語を勉強する諸外国の学生の役に立ちたいという使命感から、このプロジェクトを通じて協力してきました。

国内だけでなく、海外在住の著者の方々とも連絡をとる必要から、名柄が「まとめ役」をいたしました。が、たわむれに、私達全員の「外国語としての日本語」歴を合計したところ、580年以上にも

及びました。この600年近くの経験が、このシリーズを使っていたく皆様に、いたずらな「馬鹿の積み重ね」に感じられないだけの業績になっていればというのが、私達一同の願いです。

このシリーズをお使いいただいて、*Two heads are better than one.* (三人寄れば文殊の知恵)とお感じになるか、それとも、*Too many cooks spoil the broth.* (船頭多くして船山に登る)とお感じになったか、率直な御意見をお聞かせいただければと願っています。

この出版を通じて、荒竹三郎先生並びに、荒竹出版編集部の松原正明氏に大変お世話になりましたことを、特筆して感謝したいと思います。

一九八七年 秋

ミシガン大学名誉教授
上智大学比較文化学部教授

名 柄 迪

は し が き

本書は、主に、中級、上級段階での日本語学習者や先生方を対象に簡便に利用できることをめざした「擬音語・擬態語」の例文・問題集である。擬音語・擬態語は、よく日本語表現の特徴のひとつだと言われながら、それを中心的内容として取り上げた参考書は、今までなかった。

擬音語・擬態語は、日本語の表現上、音声的にも語彙的にも文法的にもいろいろと重要な問題を含んでいる。日本語学習者は擬音語・擬態語を学ぶことによって日本語の表現がより深く理解でき、より日本語らしい文章が書けるようになるということができよう。

本書を利用することで学習者がそれまで学んできた擬音語・擬態語について自分の身につけた知識として整理することができ、その意味・用法を確実なものにしていけるようになることを願っている。また、先生方には、教育上の必要に応じて御利用いただければありがたいことである。

本書で取り上げた擬音語・擬態語の数は多くはないが、中・上級学習者にとって必須と考えられるものは漏れなく取り上げるように配慮した。

擬音語・擬態語を中心内容にしてひとつの参考書としたのは、これが初めてであるため、いろいろと不備な点が多いと思うが、ひとまず、日本語学習者、日本語教授者、また日本語教育関係者にお届けしたい。多くの方から、いろいろと御意見、御批判をおきかせいただければ大変ありがたいことである。

本書の趣旨をご理解いただき、原文転載許可のお願いにたいしてご快諾を下された金田一春彦、井

上ひさし、山口瞳、俵万智、矢玉四郎、五味太郎、海老名香葉子、中沢けい、河野りえの各氏、志木市・志木市青少年問題協議会、朝日新聞社東京事業開発室、アルク『日本語』編集部、全国みそ連合会、サントリー、サッポロビール、UCCコーヒール、グンゼ広報室、松下電器産業、NEC、花王、藤沢薬品工業、龍角散にお礼申し上げます。

一九八九年七月

日向茂男
日比谷潤子

本書の使い方

本書の構成

本書の項目別の分類の仕方は、擬音語・擬態語の意味・内容による分類に基づいている。擬音語・擬態語に関して、その意味・内容から分類・整理する試みはあったが、基本的と考えられる擬音語・擬態語を網羅的に並べ、例文を添えたものはなかった。各項目の構成は次のようになっている。

- (一) 擬音語・擬態語の提示
- (二) 簡単な意味解説
- (三) 接続のしかた
- (四) 例文
- (五) 練習問題

本書の利用にあたって

解説は、平易な表現を使うよう心がけた。したがって、学習者が独習用としても使用できるものである。ある程度擬音語・擬態語を勉強した学習者は練習問題から着手し、欠けているところを読み返して復習してほしい。

本書で取り上げた学習事項は言うまでもなく順を追って学習していく必要はない。学習段階などに応じて、それぞれの語の意味や用法を知ったりするなど、知識の獲得、また学習を深めるために役立てるようにしてほしい。

学習者が擬音語・擬態語の用法をマスターすることによって、より深く日本語が理解でき、またより日本語らしい文章を書けるようになることを願っている。

総合練習問題では、擬音語・擬態語のよく用いられる文章を知るために新聞や雑誌の記事、広告、また子供の読みもの、随筆、詩、小説など、はば広い分野から多くのものを引用した。また擬音語・擬態語の特徴やそれに関連して日本語を論じたものを加えた。これらを通じて日本語の発想など、またどう論じられてきたかなど、それなりに知ることができると思う。

目 次

本書の使い方 xv

第一章 擬音語・擬態語について 1

- 〔一〕 擬音語・擬態語とは 1
〔二〕 擬音語・擬態語と日本語・日本語教育 3
〔三〕 本書で取り上げた擬音語・擬態語 5
〔四〕 本書の主要学習項目と本シリーズ他巻との関連性 6

第二章 動物の鳴き声 9

- 〔一〕 鳥類の鳴き声を表す言い方 9
〔二〕 哺乳類の鳴き声などを表す言い方 10
〔三〕 両生類の鳴き声を表す言い方 11
〔四〕 昆虫の鳴き声などを表す言い方 11

第三章 自然現象の中の音・様子 13

- 〔一〕 天気・湿度の様子を表す言い方 13
〔二〕 気温の様子を表す言い方 14

[九][八][七][六][五][四][三]	太陽の輝く様子を表す言い方	14
	星の輝く様子を表す言い方	14
	雲の様子を表す言い方	15
	雨の降る様子を表す言い方	15
	雪の降る様子を表す言い方	16
	風の吹く様子を表す言い方	17
	稲妻が光る様子を表す言い方	17

第四章

物が出す音

.....

[七][六][五][四][三][二][一]	ぶつかる・打つ・たたく音を表す言い方	21
	物が鳴る音を表す言い方	23
	こすれる・きしむ音を表す言い方	24
	切る・刺す音を表す言い方	26
	しぼる音を表す言い方	28
	やぶる音を表す言い方	28
	折る音を表す言い方	29

第五章

物の動き

.....

[二][一]	流れる音を表す言い方	33
	落ちる・ころがる音を表す言い方	34

〔三〕	〔二〕	〔一〕	〔九〕	〔八〕	〔七〕	〔六〕	〔五〕	〔四〕	〔三〕	〔二〕	〔一〕						
曲がる音を表す言い方	揺れる音を表す言い方	回る音を表す言い方	滑る音を表す言い方	上がる音を表す言い方	物 の 様 態 ・ 性 質	固さ・重さを表す言い方	柔らかさ・軽さを表す言い方	材質を表す言い方	光・色を表す言い方	においを表す言い方	しめりけを表す言い方	油け・粘着性 ねんちやく を表す言い方	整然 せいぜん としている様子 ようす を表す言い方	雑然 ざつぜん としている様子 ようす を表す言い方	切迫 せつぱく ・急変を表す言い方	寸法 すんぽう ・数量を表す言い方	その他
35	36	37	37	38	………	39	41	42	43	45	45	47	49	49	52	53	53

第六章 物の様態・性質 39

第七章 人の動作・人の声や音 ……………

55

歩く・走る・跳ねる様子を表す言い方 55

立つ・倒れる・止まる様子を表す言い方 59

食べる・飲む・喫う・吸う様子を表す言い方 60

空腹・渴きを表す言い方 63

激しく息をする様子を表す言い方 63

咳をする音を表す言い方 64

言う・話す様子を表す言い方 64

笑う様子を表す言い方 66

泣く様子を表す言い方 68

眠る様子を表す言い方 70

その他 71

第八章 人の身体的特徴 ……………

75

第九章 人の健康状態 ……………

79

第二十章 人がいる・いない様子 ……………

83

第二十一章 人の様子・心情・感覚など ……………

85

〔一〕 人の性格を表す言い方 85

第二章 総合問題

[二]	気持ちの高揚・充足を表す言い方	86
[三]	不注意・失望を表す言い方	88
[四]	不安・心配・小心を表す言い方	89
[五]	不愉快・いらだち・疲労を表す言い方	92
[六]	覚醒・放心を表す言い方	94
[七]	人の動く様子を表す言い方	95
[八]	程度を表す言い方	98

別冊解答……………卷末

第一章 擬音語・擬態語について

〔一〕 擬音語・擬態語とは

『擬音語・擬態語辞典』（浅野鶴子編、角川書店、昭和53年）の冒頭で、擬音語・擬態語を論じている。「擬音語・擬態語概説」（執筆 金田一春彦）によると、擬音語、擬態語は次のように説明されている。また、擬音語は二種のものに、擬態語は三種のものに下位分類されている。

◎擬音語……外界の音を写した言葉

○擬音語……無生物の音を表すもの

○擬声語……生物の声を表すもの

◎擬態語……音を立てないものを、音によって象徴的に表す言葉

○擬態語……無生物の状態を表すもの

○擬容語……生物の状態（動作容態）を表すもの

○擬情語……人間の心の状態を表すようなもの

これは、擬音語・擬態語の広がりをよく教えてくれるものである。ただし、これらの用語は、ふつうそんなに厳密に使い分けられているわけではない。特に、先の広義の擬音語は、従来、擬声語と

呼ばれることが多かった。

『大辞林』（松村明編、三省堂、一九八八）では、この国語辞典の特色のひとつとして一ページをさいた二色刷の「特別ページ」を設けているが、そこでは「擬声語・擬態語」が一項目になっている。そこで、そのそれぞれを『大辞林』でひいてみると、

◎擬声語……事物の音や人・動物の声などを表す語

◎擬態語……物事の状態や様子などを感覚的に音声化して表現する語

とある。さらに擬態語は「広義には擬声語の一種ともされる」と説明している。

擬音語、擬態語を含め音象徴（Sound Symbolism）と呼ぶことにして、これが日本語の中で独特な位置を占めることは、先の『大辞林』の「特別ページ」の一項目となっていることからわかる。この「特別ページ」は全部で十九項目あり、「敬語」や「百人一首」と並んでそれが取り上げられているのである。

この「擬声語・擬態語」の特別ページは、かなりくわしく丁寧（ていねい）に日本語の音象徴の意味的分類をほどこしている。もちろん、一ページの特別ページだから取り上げられている語数は多くないが、分類自体は大変興味深いものである。本書では、この分類を大きくもとにして擬音語・擬態語を取り上げたので、目次を見ることがその概要を知ることができる。

音象徴語の意味的分類をしたものは、他にもあるが、ここでは『漫画で楽しむ英語擬音語辞典』（松田徳一郎監修、研究社、一九八五）の「付録」の中の「類別索引」を簡単に紹介しておきたい。

○動物の鳴き声